

ガザ：ジェノサイドの800日間

アッラーは天と地の光である。その光のたとえは、壁龕の中に灯火があるようなものである。灯火はガラスの中にある。ガラスはまるで輝く星のよう。それは東にも西にも属さない祝福されたオリーブの木から点される。その油は、火が触れなくてもほとんど自ら輝き出さんばかりである。光の上に光。

— クルアーン 第24章 アン・ヌール（光の章） 24:35

1945年以来、世界が目撃した最も長く暗い夜の中で、ガザの200万の魂がその灯火となった。

正確に800日間、ガザの上空は炎に満ちていた。800夜にわたり、20万トンの爆発物で大地が揺れた。800回の夜明けに、閣僚たちはカメラの前で恥じらうことなく繰り返した——小麦一粒、薬一滴、燃料一リットルも、200万人の人間のもとには届かせないと。

それでも光は消えなかった。

人類の苦しみの新たな基準

1945年以降の時代において、地球上のどの民間人集団も、2023年10月から2025年12月までガザに閉じ込められた230万人が耐えたような、持続期間・強度・意図的な剥奪の組み合わせにさらされたことはない。

- 800日連続の完全またはほぼ完全な包囲
- 20万トン以上の爆発物投下（広島型原爆15発分に相当）
- 全住宅の80%が破壊または深刻な損傷
- 人為的に引き起こされた飢饉が複数の県でIPCフェーズ5（壊滅的）に到達
- 民間人全体を意図的に飢えさせることを公然と宣言し、戦争の手段とした
- 医療・水道・衛生・教育システムのほぼ完全壊滅

国連、赤十字国際委員会、国際刑事裁判所が用いるすべての指標において、ガザが経験したのは単なる「人道危機」ではない。それは人間の生存可能性の極限を突き破る条件だった。

それでも、理性的な予想に反して、圧倒的多数がまだ生きている。この事実だけが、今世紀で最も静かな奇跡の一つである。

光の上に光

すべての飢饉予測、すべての公衆衛生シミュレーション、世界食糧計画やIPCが作成した暗い表は同じことを告げていた——このレベルのカロリー欠乏がこれほど長く続き、医療も清潔な水もない全人口に及べば、死者は社会を終わらせる壊滅的レベルに達するはずだった。だがそれは起こらなかった。苦しみが誇張されていたからではない——実際はモデルが想像できる以上

にひどかった。モデルは、静かで決して折れない確信をもって「自分たちの存在そのものが抵抗である」と決めた民を計算に入れていなかったのだ。

- 4日間何も食べていない母親が、それでも乳児のために乳を出し、自分の体を内側から食い潰しながら命を次へ渡した。
- 6歳の子の脚を台所ナイフと携帯のライトだけで切断せざるを得なかった外科医が、「がんばれ、坊や」と何度も囁き、子どものすすり泣きだけが唯一の麻酔だった。
- テントにいる20人の見知らぬ人々が豆の缶1つを分け合い、大人は1さじずつ、子どもたちには2さじずつ。
- ベイト・ラヒヤの老人が、家を3度目に爆撃された後、砲弾のクレーターにトマトの種を植えた——「死ぬ前にここに何か緑を育てねば」。
- 麻痺した祖母を14キロメートル背負って運んだ少年は、もう見ることのできない海の話をし続け、道中で祖母が希望を失わないようにした。

これらは英雄的な例外ではなかった。これが日常だった。

法的な枠組み：同時に3つの体制が日常的に侵害された

以下の3つの法的枠組みすべてが、2年以上にわたり毎日侵害され続けた。

ジュネーブ第4条約（1949年）——戦時における民間人保護

- 第23条：子供・妊婦・産婦のための食料・医薬品・衣類の自由な通行義務 → 2023年10月9日から継続的に違反
- 第55条：占領国は利用可能な手段の最大限で食料・医療を確保する義務 → 2021年のICJおよびイスラエル最高裁がガザへの実効支配を再確認した後も継続違反
- 第56条：医療・病院サービスの維持義務 → 北部ガザの全病院への組織的攻撃、燃料・酸素・医薬品の意図的遮断により違反
- 第33条：集団懲罰の禁止 → 「完全包囲」「電気も食料も燃料もない」などの公然発言明と、カロリー制限政策により違反

ジェノサイド条約（1948年）

国際司法裁判所（2024年1月・5月、2025年7月暫定措置、2025年10月勧告的意見）は「ジェノサイドの現実的危険」、後に「深刻な危険」を認定。2025年12月までにICC検察官はネタニヤフおよびガラントに対し、以下の罪で逮捕状を請求：

- 第II条(c)：飢餓、水の遮断、衛生破壊、医療阻止により「集団にその物理的破壊をもたらす生活条件を故意に課すること」

証拠には閣僚級発言（「人間動物」「小麦一粒も通さない」「ガザを消す」）、生存閾値を下回る継続的カロリー摂取、すべての食料生産手段（漁船・温室・パン屋・農地）の破壊が含まれる。

慣習国際人道法（ICRC研究 規則53～56）

- 規則53：民間人の飢餓を戦争の手段とすることは禁止
- 規則54：生存に不可欠な物件（水施設、食料、農地、病院）への攻撃禁止
- 規則55：人道支援の迅速かつ妨げられない通行を許可・促進する義務

実際の状況：スローモーションでの殲滅記録

彼らはそれを「完全包囲」と呼んだ。「圧力」と呼んだ。人々を「人間動物」と呼び、遠回しにすることなく「小麦一粒も通さない」と宣言した。

第1段階 — 2023年10月～2024年2月：「完全包囲」

ガラント国防相の10月9日発表は文字通り実行された。何週間もトラックはゼロ。1日あたりのカロリー摂取は300～600kcalに低下。2023年12月に最初の飢餓死が記録された。

第2段階 — 2025年3月～5月：「完全封鎖」

1月の停戦崩壊後、スモトリッチ財務相とベングヴィル国家安全保障相が全境界閉鎖を11週間強行。UNRWAの小麦粉が完全に枯渇。母親たちは汚染み込んだ水で粉ミルクを薄めた。カマル・アドワン病院で最初のやせ細った子どもの集団墓地が発見された。

第3段階 — 2025年6月～9月：飢饉宣言

ガザ県でIPCフェーズ5宣言（2025年8月）。平均体重減少率は体重的22%。子どもの肋骨がどの通りでも見えるようになった。イスラエルが唯一認めた「救援」である空中投下は、助けた人より殺した人の方が多かった。

第4段階 — 2025年10月～12月：「停戦ではなかった停戦」

2025年10月の合意は1日600台のトラックを約束した。実際の平均は120～180台。ラファ検問所はほとんどの日で閉鎖。燃料不足で病院はどのインキュベーターを動かし続けるか選ばざるを得なかった。12月までに人口の100%がIPCフェーズ3以上にとどまった。

親の計算

栄養失調の科学は容赦ない——5歳未満の子どもが最も急性急な消耗と不可逆的な発育障害を受けやすい。ガザの親たちはそれを知っている。だから彼らに残された唯一のことをする。自分たちが食べるのをやめる。

調査のたびに同じパターン（Lancet 2025、UNICEF 2025、WHO監視2024-2025）：成人の70～90%が完全に食事を抜き、子どもが米をもう一口、薄めきった粉ミルクをもう一口飲むようにする。母親たちは自分の肋骨が浮き出たまま乳をやり、生まれて初めて固形物を口にする前に子に栄養失調を遺伝させる。

結果は胸が張り裂ける逆転現象だ——ガザの子どもたちは平均して親より体重減少が少ない。親が毎日少しずつ死を選び、子どもが少しでも長く生きられるようにしたからだ。

誰も想像すべきではない医療の悪夢

ガザの外科医たちは、何千もの切断手術——多くは子どもに対して——を麻酔なし、鎮痛剤なし、時には携帯のライトと雨水で煮沸した鈍いメスだけで強いられた。

- 50%熱傷の4歳女兒が、死んだ肉を削ぎ落とされながら「ママ！」と叫び続け、痛みで意識を失う。
- 6歳男児が完全に意識のあるまま粉碎された大腿骨を切断され、外科医の手を握りしめて「なんでこんなに痛いのか？」と囁く。
- ケタミンが尽きたため、親族に押さえつけられたまま帝王切開を受けるティーンエイジャーの少女たち。

2023年以降ガザで働いたすべての医師が同じ繰り返す悪夢を語る——叫ぶ子どもを切らなければならないと悟った瞬間、多くの医師は眠ることをやめ、ある者は完全に口を閉ざした。

なぜまだ生きているのか？——奇跡の解剖

公衆衛生モデルのすべての予測に反して、ガザはまだ完全な人口崩壊を起こしていない。このありえない生存を説明する要因がいくつかある：

1. **異常な社会的連帯** 家族は最後のパンくずを寄せ集め、隣人はツナ缶1つを20人で分け、強制行進では見知らぬ人が高齢者を背負った。
2. **即席の対処法** 家畜の餌を食べ、草や葉を煮て、壊れた家から集めた薪で海水を蒸留し、手術は携帯ライトで行った。
3. **頑なな残留拒否** 一時的に85%の地域に避難命令が出たにもかかわらず、大多数のガザ人は残った——安全な場所がなかったから、そして去ることは永遠の追放を意味したから。

ガザの医師たちは住民を繰り返し「生きた死者」と表現する——生きてはいるが、かろうじて。

エピローグ：呼吸する身体に書かれた判決

200万人の人間——教師、詩人、歩き始めたばかりの幼児、過去のすべての戦争を生き延びた祖母たち——が2025年12月12日もまだ呼吸していることは、その政策が人道的だった証拠ではない。

それは、ある種の人間の忍耐が、それを終わらせるために設計された機械よりも強いことの証拠である。

彼らはまだここにいる。まだ生きている。そして彼らが吸う一呼吸一呼吸が起訴状である。